



●満点100点 ●時間50分

① 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 投稿した詩が文芸雑誌に掲載された。
 (2) 音楽室から美しい旋律が流れてくる。
 (3) 夕立の後、木々の葉から滴がしたたる。
 (4) 小説を読んで、主人公の鋭い推理に引きつけられた。
 (5) 互いに合意できる解決策を模索して、議論を重ねる。

② 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) カイサツを終えて、列車の到着を待つ。
 (2) 電気器具をセンモンに扱う店が軒を連ねる。
 (3) ヒタイの汗をぬぐいながら、山頂を目指す。
 (4) 公会堂の落成をイワって、演奏会が催される。
 (5) 校庭のテツボウで、さか上がりの練習をする。

③ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

太一は、何度も何度も浜辺に出て沖を眺め、潮が引くのを今か今かと待ち続けた。嬉しくてたまらなかった。珊瑚礁に渡るのは初めてのことだ。今日は美代と一緒にではない。どこへ行くにも付いて行きたがる美代を置いて、辰兄いと二人きりである。それだけでも太一は、なぜか大人になったような気分になった。

辰兄いは、縁側に座り込んで、漁に出かけるための小道具の準備を始めていた。水中メガネのゴム紐を点検し、銚の切っ先を磨いている。(1) 太一は、その傍らで辰兄いの仕種を覗いては、すぐに浜辺

に出て潮の引き具合を確かめ、また戻って来るといふ落ち着かない動作を、何度も繰り返していた。

辰兄いが、魚を釣る仕掛けを作り始めた。テグス(釣り糸)に釣り針を括り付け、それから釣り糸の先端を強く噛み、もう一方の糸を握りしめてぐいと引っ張る。そのようにして仕掛けは、すぐに十本ほどでき上がった。そのうちの一本を太いモトイト(基礎糸)のテグスに結び、四角い骨組みだけの木枠材に、繰り糸を繰るようにくるくると巻き付けた。

「太一、これはお前のものだ。」

辰兄いが、笑いながら太一に言う。

「これを、珊瑚礁の深い割れ目に垂らして大きい魚を狙うのだ。頑張れよ、太一。」

辰兄いが、その仕掛けを渡してくれた時、太一は、はやる心を抑えきれなかった。しかし、辰兄いの分は仕掛けを作らないのが不思議で聞いてみた。

「辰兄いは、なんで魚を捕るの。」

「俺は、銚……。」

辰兄いが、身を乗り出して目で壁に立ててある銚を示した。そして、準備はすべて完了したとでもいうかのようにごろつと横になった。

太一は、また庭に下りて海を見に浜辺に走った。

昼前になって珊瑚礁がくつきりと沖合に浮かんだ。波が珊瑚礁に遮られて、線を引いたように白いしぶきを上げていく。そこを境界にして、後方に群青色の海が広がり、手前には、静かで透明な海が輝いている。(2) 海水の透明さゆえに、海底の珊瑚礁の色が海面に浮

かび上がり、緑色をはじめとして無数の色が踊っている。時折、雲の影が海面に映り、さっと流れるように走っていく。太一は、心踊らせて家へ戻り、辰兄いに潮が引いたことを告げた。

縁側に寝転がっていた辰兄イは、起き上がると地下足袋を履き、鉾を持った。

「さあ、太一、行こうか。」

そう言うと、さつさと歩き出した。お父もいない。お母もいない。美代も梅子ネエも源助じいもない。太一は、見送る者がいなくて少し淋しい気がする。タエおばあだけが台所にいる。太一は、小さな魚籠を持ち、釣り道具を持って台所に回り、タエおばあに声をかける。

「おばあ、行ってくるよ。」

「待って、太一。芋がすぐ煮えるよ。食べてから行きなさい。」

おばあが慌てて鍋の蓋を開ける。白い湯気がぱーっと上がり、一瞬おばあを隠す。太一は、それを見て慌てて返事をする。

「いいよ、おばあ、帰ってから食べるよ。」

太一は、とても待てそうにない。それに辰兄イは、おばあの言葉に耳を藉さず、さつさと歩き出している。

「おばあ、いいよ。行くよ。」

そう言うと、太一はおばあの止める声を振り切って、辰兄イを追いかけた。

珊瑚礁の浮かぶ沖合の海は、太一の予想以上に美しかった。色とりどりの魚が泳ぎ、極彩色を有した名も知らない大小の無数の生き物が、太一の目を至る所で釘付けにした。

辰兄イは、釣りの餌にするウニを数個集めると、それを割り、刺のない柔らかな口の部分に釣り針を刺すと珊瑚礁の割れ目の前に行き、テグスをゆつくりと引き伸ばし、海底深く垂らし始めた。そして、しゃがんだままでしばらく待った。太一も、辰兄イの傍らで、声を出さずにじっとしゃがんでいた。すぐに辰兄イの右手が、素早く大きく動いた。反応があったのだろう。

「太一、掛かったぞ。」

辰兄イは立ち上がりながらテグスを手繰り、木杵材にくるくと巻き付けると一気に引き上げた。大きな魚が釣り上がってきた。太一の両手に余るほどの大物である。太一は、干上がった珊瑚礁の上で跳ねる魚を見ながらびつくりした。

「イラブチャー。イラブチャーと言うんだよ、この魚は。」

辰兄イが太一に言う。蒼い海底のような色をした魚である。辰兄イは、手際よく口に掛かった釣り針を外す。イラブチャーは、あらためて勢いよく跳ねる。太一が、慌てて手で押さえる。(3)辰兄イは、それを見て笑っている。そして、先端部分だけに針金を括り付けた細い縄紐をイラブチャーの顎から口元に通して持ち上げた。

「今日は、おいしい刺し身が食べられるぞ。さあ太一、今度はお前が釣ってみろ。」

辰兄イは、そう言うと同じように釣り針に餌を付け、太一にそれを渡す。

「いいな。釣り針が海底に着く手前で釣り糸を出すのを止める。そのままの状態が魚が喰い付くのを待つ。喰い付いたらぐぐーと感触が指先にくる。その瞬間を引き上げる。分かったな。」

辰兄イは、それだけ言うと煙草を出して旨そうに吸った。太一は、辰兄イに言われた通り珊瑚礁の割れ目の前にしゃがみ、そこから海底に向かってゆつくりと糸を伸ばした。足元の海底には、魚が群れているのが太一にも見える。しばらくして、ぴーんと糸が張る。指先に糸が食い込む。太一は、慌てて立ち上がり、釣り糸を巻き上げる。

「太一、いいぞ。」

辰兄イが走り寄って来る。引き上げると、辰兄イに負けないくらいの大物だ。

「太一、やったな、すごいぞ。」

辰兄イは、そう言いながら釣り針を外す。

太一は、もう嬉しくてたまらない。思わず村の方を見て、「お母、やったぞ。」

と、心の中で叫ぶ。早く自分が釣った魚を見せてあげたい。その興奮を持ってあまして辰兄イに言う。

「辰兄イ、これもイラブチャーだね。」

「そうだ。太一、お前は、やつぱりいいウミンチュになれるぞ。」

辰兄イが、そう言いながら太一を見上げる。(4)太一は、再び胸を張って村の方を見た。

海を渡る風の匂いにおが太一の鼻を甘くくすぐった。真夏の太陽は、ざらざらと燃えるように強く照りつけていた。

辰吉は、やがて釣りを太一に任せ、服を脱いで乾いた珊瑚礁の上に置き、水中メガネを掛けて海に潜った。手には長い銚しやうを持った。

銚には、柄の後方にゴムチューブを括り付けている。これを力いっぱい引つ張って放すと、銚は水中を矢のように走って狙った魚の胴体を刺し貫く。辰吉には釣り以上にスリルがあり、またこの方法が素早く大量に魚が獲れることを知っていた。

太一は三匹めの魚を釣り上げた後、自分も辰兄イのように深い珊瑚礁の割れ目の上を泳いでみたいと思った。仕掛けを巻き上げると辰兄イに作ってもらった水中メガネを掛けて、海の底を覗いてみた。太陽の光が海中を飛行機雲のように走っている。大小の色とりどりの魚たちが悠々と泳いでいる。しかし、深みは、底が見えずに静まりかえっている。

太一は、初めて見る神秘的な海の魅力に不思議な感動を覚えた。魂が吸い込まれるような思いだった。不気味な恐怖さえ覚えた。同時に、この海の上を一人で泳ぐことが、大人になることなのだと不思議な誘惑をも覚えた。対岸までの距離をもう一度確かめる。それから、思い切って足元の珊瑚礁を蹴けって、身体を力いっぱい海面に伸ばした。

(大城貞俊「椎の川」による)
〔注〕 珊瑚礁——コーラル・リーフ。さんごしょう。
イラブチャー——ブダイ。ウミンチュ——漁師。

〔問1〕

(1) 太一は、その傍らで辰兄イの仕種を覗いては、すぐに浜

辺に出て潮の引き具合を確かめ、また戻って来るという落ち着かない動作を、何度も繰り返していた。とあるが、太一が「落ち着かない動作を、何度も繰り返していた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 辰吉と二人で初めて珊瑚礁に渡って漁に出られることが楽しみで、早く潮が引いて出発できないかと待ち遠しく思っていたから。

イ 潮が満ちて珊瑚礁に渡れなくなってしまうのは困ると思ひ、じっくり腰を据えて仕掛けを作っている辰吉がもどかしかったから。

ウ 初めて珊瑚礁に渡って漁をすることが不安でたまらず、わざと目立つ動作を繰り返して辰吉に心配な胸の内を訴えたかったから。

エ 大きな魚を釣るための小道具の作り方を教えてもらいたくて、辰吉の準備が早くひと区切りつかないかといらいらしていたから。

〔問2〕

(2) 海水の透明さゆえに、海底の珊瑚礁の色が海面に浮かび上がり、緑色をはじめとして無数の色が踊っている。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 美しい海底から無数の珊瑚礁が浮かび上がる雄大な情景を、想像力豊かに思い浮かべながら表現している。

イ 澄んだ海の珊瑚礁が波の揺らめきを通してさまざまな色合いに見える情景を、生き生きと表現している。

ウ 緑色に映えた珊瑚礁が次第にその色調を強めていく幻想的な情景を、時間の経過とともに表現している。

エ 澄んだ海の中に沖合の珊瑚礁までも陰影に富んで透かして見える情景を、大づかみに表現している。

〔問3〕 (3) 辰兄イは、それを見て笑っている。とあるが、この表現から読み取れる辰吉の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 両手に余るほどの大物の扱いに手こずっている太一を見て、温かくほほえんでいる様子。

イ 魚の扱いもうまくできないし釣りも未熟な太一を見て、期待外れで苦笑いしている様子。

ウ 釣り上げた魚にただ目を丸くするばかりの太一を見て、得意げにほくそえんでいる様子。

エ 釣った魚の扱いも分からず戸惑う太一を見て、安心させようと作り笑いをしている様子。

〔問4〕 (4) 太一は、再び胸を張って村の方を見た。とあるが、この表現から読み取れる太一の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 初めての漁で辰吉より釣りの腕がまさると分かって有頂天になり、その事実を母に伝えようと喜び勇んでいる。

イ 初めての漁で一匹釣っただけなのに辰吉のほめ方が大げさで恥ずかしくて、照れくさいのを必死にこらえている。

ウ 初めての漁で辰吉が感心するほどの大物を釣ったことが誇らしくて、母たちに早く知らせたいと心が高ぶっている。

エ 初めての漁で辰吉に立派な大人であるとおだてられたことを不安に思い、それを紛らそうと自らを奮い立たせている。

〔問5〕 この文章を通して最も強く読み取れるのは、次のうちではどれか。

ア 太一に漁を教え込もうと海に出た辰吉が、珊瑚礁に潜って魚を追ううち、新しい漁法を発見して夢中になっている様子。

イ 豊かな自然の中で生きる家族が、たくましい成長を期待して太一に厳しい試練を与えながら、遠くから見守っている姿。

ウ 太一や辰吉のような漁師でさえ、一度珊瑚礁の海に潜れば、神秘的な魅力でとりこにされてしまうほどの自然の美しさ。

エ 辰吉に導かれた初めての漁で自信を得た太一が、珊瑚礁の海を一人で泳ぐことで、力強く成長を遂げようとしている姿。

〔4〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

遊びと呼ばれる文化は、人類文化の中にどのように広がっているのだろうか。その広く深い広がりを探ってみよう。(第一段)

インドのニルギリ丘陵近くに滞在して、採集狩猟民族の調査をしていた友人の話聞いたことがある。その民族は農耕以前の段階にあって、「手から口へ」の貧しい生活をしてきたことである。

その日、その日の生活をやりくりするといえ、さぞかし多忙な、原野を走り回ってかろうじて食糧を手に入れる生活に追われているものと思ってしまうのであるが、その友人の話によると彼らの生活は意外にのんびりしていたというのである。生きるために必要な物資を集めるには、日に二、三時間もあれば十分だということである。

それなら、残りの時間はどうしているかというと、村でゴロゴロして、子供と遊んだり、山野をうろつき歩いてうまいもの探しをしているのだという。蜂の巣を探し当てる蜂を採り、ドリアンの木からトゲトゲの、しかし内部はクリームのように熟した果実をもぎ取る。予想に反して、狩猟採集民の生活には余裕がある。生きるための生活と遊びが一体化している。そういうことであった。(第二段)

この話を聞いて、私はびっくり仰天してしまった。(1)しかし、よく考えてみるとそのとおりかもしれない。自然が民族のために提供

してくれたその場所に、それぞれの民族が入り込んで暮らしているわけ、彼らは自然の恵みの中に安心して身を寄せていたのである。民族と自然は、単に生産活動によってだけ結びついていたのではない。遊びによって結びついていたのである。蜂蜜のトロリとした甘さにつられて蜂の生態を知り、ドリアンの実をめぐるその所有関係から、社会が編成されたかもしれないのである。(第三段)

われわれの内部に、遊びは子供、仕事は大人という常識が巣くっている。しかし、この常識によって大人と子供の間に境界線を引くことは避けなければならない。人生についての実り豊かな、新しい展望を得ることを妨げるからである。私は人生イメージを「竹」に求めて解釈したことがある。竹の節をイメージとして、子供、大人、老人を、あるいはさらに細分化された人生の段階を区切る。しかし、竹には中空の部分が内部にあつて、それが竹の、いや、人生の全体を貫いている。子供、大人、老人の区別を貫いているもの、それを遊びと呼びたいのである。人生は遊びの相においてその実相を映し出しているように思われる。子供たちは生活のあらゆる場面を遊びに取り込んでしまう。水と土と木の葉っぱだけでも一日中遊んでいることができる。大人の生活は、仕事を追いかけているようであるが、理想としては仕事と遊びの一致が求められている。産業社会において趣味といい、レジャーといつて、生命力を回復しようとしているのがそれである。(2) 人生は、注意深く見れば見るほど、遊びによって裏づけられていたのである。その意味でニルギリ丘陵の人々と相違することはなかったのだ。(第四段)

それぞれの遊びが、民族の領域を超えて広がっている。しかし、それが人類的ないし普遍的な広がりを見せることの意味については、あまり注目されていない。お手玉は日本の子供の遊びであるだけでなく、ヨーロッパからアジア各地の民族の間に分布している。一種のチェス(将棋)はアフリカからアジアを経て太平洋地域に広まって

いる。あや取りの分布もすこぶる広い。こういう遊びは、かなり複雑な、いや、たいへん込み入ったルールを持っているのだが、それが民族から民族へ、地域から地域に広まっていたのである。(第五段)

現代は国際化の時代だといわれる。それは主として政治、経済、文化の上層における交流がいわれているのであるが、遊びはむしろ底辺における交流であり、それが極めて古い時代に、既に達成されていたのである。子供文化の共有、子供文化における相互理解については、もっともっと探求されてよいことだと思う。(3) 遊びの中で異民族、異文化が互いに交流した。文化の深層はその文化を超えていたのである。そのとき、一体、何が共有され、分有されたのであろうか。(第六段)

ブランコといえば公園にある、村の広場にある、高床住居の床下にあると思つて、ごくあたりまえな遊具だと思つてしまふ。しかし、その同じブランコが、少し大型で形と構造は違ふにしても、ネパールの山稜さきょうにあり、東南アジア北部山地の突出した屋根にあり、そうかと思つと町なかの寺院にあつてヒンドゥー教の祭具になっていることがある。ブランコに乗つて右左にゆらゆらする。乗り手が地面に近づいたかと思つと、また、そこから遠ざかる。上下する。近づいて離れ、離れて近づく。民族の考え方によると、ブランコの動きは太陽の運動に似ている。似ているからこそそこに同じ原理が働き、同じ力が潜んでいたに違ひない。地上の生き物を育て、力づけ、また、枯死させる。ブランコと同じエナジーの往還が認められる。だからこそブランコ乗りが呪術じゅじゆつとして取り込まれ、稲をはじめとする作物の成長儀礼となり、女性の出産を促す力になり、また、年月の運行を確かにするための年中行事にもなつた。遊びが宇宙の秘密にかかわっていたのである。(第七段)

遊びは人間のころ、その精神の深みにあつて人間と自然を結びつけるものである。といつても、現代文明の中の装置としての遊び

場を見慣れているわれわれには、直ちに理解しにくいことかもしれない。ますます人工的な遊び、反自然の遊びに導かれていくように思われるからである。あまりにも演出され計画されすぎている。

(第八段)

ところが、一方では、こういう逆説的なことがいわれている。道具を使って遊ぶより、道具なしの遊びの方がおもしろい。ルールのある遊びより、ルールのない遊びの方がおもしろい、というのである。なるほど、振り返ってみるとそうかもしれない。メリー・ゴラウンドに乗るより、鬼ごっこの方がおもしろく、遊園地の中の遊びより山野を駆け回る方がおもしろい。(4) われわれは自然の中における身体の自由な運動、自由な表現を忘れているのではなからうか。自然と応答することの楽しさ、自発的で、自由であることに由来する遊びを忘れてしまったのではなからうか。かつてドイツの民族学者レオ・フロベニウスは、遊びは自然と文化の波打ち際の出来事で、遊びこそが文化の母胎だといったけれども、現代文明は今こそ、この原点、自然と文化の共通の立脚地に立ち戻らなければならぬのではなからうか。(第九段)

自然からますます遠ざかってゆく文明が作為的な知とその結果としての知的蓄積だけで自然を取り戻すことはできない。身体を通して、直接に自然に触れ、自然と対話し、自然と一体化する。その一体化したものが思考と行為の出発点でなければならぬのである。それが、最も単純な、そして豊かな遊びなのであった。本当の遊び文化を回復したいものである。(第十段)

(注) エナジー——エネルギー。
(岩田慶治「遠景のへ遊び文化」による)

(問1) しかし、よく考えてみるとそのとおりかもしれない。とあるが、「そのとおりかもしれない」の「その」の指している内容として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 蜂蜜や果実などの自然の恵みを当てにして遊びながら暮らしている、日々の食糧にも事欠いてしまうこと。

イ その日に必要な物資を自然の中で探し回りながらも、子供と遊んだり山野で楽しんだりするゆとりがあること。

ウ 子供とのんびりと遊んでいても生きていけるのは、農耕によって豊かな作物を収穫しているためであること。

エ 食糧を手に入れるのに精いっぱい、の狩猟採集の生活では、蓄えがないために遊んでいる暇など少しもないこと。

(問2) (2) 人生は、注意深く見れば見るほど、遊びによって裏づけられていたのである。とあるが、ここでいう「遊びによって裏づけられていたのである」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 人生は、子供の遊びに浸ることで新鮮になるのである。

イ 人生は、遊びより仕事を優先することで充実するのである。

ウ 人生は、遊びがあることで豊かなものになるのである。

エ 人生は、遊びを追いかけることで理想の姿となるのである。

(問3) (3) 遊びの中で異民族、異文化が互いに交流した。とあるが、「遊びの中で異民族、異文化が互いに交流した」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 政治や経済の交流が深まると、民族や文化の違いを超えてそれぞれの遊びが紹介されるようになった、ということ。

イ 民族や文化を超えて広がっているさまざまな遊びに注目すると、互いの交流の跡を見いだすことができる、ということ。

ウ 各民族の遊びを調査すると、交流し合う以前の極めて古い時代における各文化の特質が明らかになる、ということ。

エ 外国文化に対する関心が高まると、民族を超えて子供たちが遊びによって交流する機会が次第に増えてくる、ということ。

(問4) 第五段と第六段との関係を説明したものとして適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 第五段で述べた内容を受けて、第六段では新たな視点からとらえ直して論の展開を図っている。

イ 第五段で述べた内容に対して、第六段ではそれとは反対の内容を示して話題の転換を図っている。

ウ 第五段で述べた内容に基づいて、第六段ではそのあらましを示して分かりやすく解説している。

エ 第五段で述べた内容について、第六段ではその具体例を挙げた論の内容を理解しやすくしている。

〔問5〕 (4) われわれは自然の中における身体の自由な運動、自由な表現を忘れていたのではなからうか。自然と応答することの楽しさ、自発的で、自由であることに由来する遊びを忘れてしまったのではなからうか。とあるが、このことについて、あなたの考えたことを、「遊び」、「自然」、「現代文明」の三語を用いて二百字以内にとめて書け。なお、書き出しの際の空欄、や・や「なども、それぞれ字数に数えよ。

〔5〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

はやり言葉というのはいつ頃からあるのだらう。テレビや新聞・雑誌などのなかった時代に、はたして流行語などというものがあつたのだらうか。

私見だが恐らく平安時代の昔までさかのぼってもいいのではないかと思う。と言うのは、清少納言が『枕草子』の中で

いやしきこともわるきことも、
さと知りながらことさらにいひたるは、あしうもあらず。

我がもてつけたるを (1) つつみなくいひたるは、
あさましきわざなり。

と述べている。つまり、内容が分かっていると言うのはかまわないが、

わざと格好をつけるために、あたりをはばかることなく言うのはよくない、と言うのだ。(2) ちょうど現代の若い人がタレントの言葉などを、カッコをつけてまねたがるのを非難するのと同じ口調だ。

しかし、そういう清少納言自身、流行に弱い部分をたくさん持っていて、たとえばこれは言葉ではないが、当時暖房に使う炭というものが大変珍しいものだった。それまでは薪を使っていたのだが、簡単に火がついてしかも家の中でくすぶらない便利なものとして宮廷で使われたのだ。彼女はそれを知っていることが得意だったらしく、「春は曙」の中に、朝つけた炭が午後になって灰で白くおわれているのを見苦しい、と書いている。

さて、言葉として新しい表現がほとんど生まれたと思われるのは、鎌倉時代にできた『平家物語』だ。これは琵琶法師が楽器の琵琶をベンベンとかき鳴らしながら、人々に平氏の栄枯盛衰を語って聞かせたものだが、その一節の中に、屋島の戦いで源氏の武者、那須与一が弓で的を射る場面があり、「よっぴいてひょうと放つ」という表現がある。これなどは当時としては大変新鮮な表現で、恐らく大衆の中にあつたという間に浸透していった言葉だらう。そのほかにも『平家物語』の中には「ひひめく」（ひいひい泣く）、「さもさうず」（それはそうではない）、「しゃつ」（そいつ）などの新しい表現がある。これらは皆、それまでになかった言葉で、当時としては随分センセーショナルな受けとめ方をされたのではなからうか。

また、時代がもどるが『土佐日記』とか『古今集』などの中にも新しい表現が数多くあり、それがそれ以降ひんぱんに使われ出した例は枚挙にいとまがない。こうした言葉は当時のやはり言葉といってもよさそうだ。

江戸時代に入ると、さまざまな分野からはやり言葉は生まれた。この時代も戦記物を語る講釈師というのが人気があり、「手ぐすねをひく」「矢つぎばや」「ほこ先を転じる」「矢おもてに立つ」「横槍を

入れる」「しのぎを削る」「一騎打ち」といった表現が誕生した。扇子をバツタ、バツタと講釈台に打ちすえながら、調子よく物語る講釈師の語りぶりは、庶民にとってさぞかし魅力的だったことだろう。こうした言葉は、みんな戦記物の表現だが、あつという間に日常生活に定着したのである。

当時のもう一つの人気的是歌舞伎や浄瑠璃である。「のべつ幕なし」「捨てぜりふ」「ひっこみがかない」「大むこうをねらう」「大見えをきる」の表現はそんな所から生まれてきている。

また、庶民の楽しみに「からくり」と言われるものがあり、今でいうサーカスの興業のようなものに、人はわんさか押しかけた。「たらい回し」は曲芸の芸人があお向けに寝て足でタライをクルクル回し、それをヤツと次の人に渡す、という芸からでてきた。

こうして見てみると、やはり言葉というのは、庶民にとっての娯楽から生まれた言葉が大変多いということに気付く。現代のテレビや雑誌のようなマスコミがなくても、戦記物を語る講釈師、落語、歌舞伎など、大衆にアピールするものはあったのである。そういう中から流行語が生まれたということは、昔も今も変わらないということが言える。

(3) また言葉がはやるには、それを使い出した人に大変な魅力がある、ということが不可欠な要因になる。現代、人気タレントの言葉がはやるように、歌舞伎役者や講釈師は人気があったのだろう。江戸時代に京都から来た言葉が大変はやったことがあった。これらは京都という古い文化に対する江戸庶民のあこがれが根底にあったのだろうと思われる。

ただ、今と違ってマスコミの数が大変少なかったから、一つの言葉が生まれれば必ず定着していった。だから今もその言葉が使われ続けているわけだ。現代のようにマスコミがたくさんあり、新しい言葉が浮かんでは消え、消えては浮かぶ現状では、(4) 一体どんな言

葉が将来定着していくのか、想像もつかない。十年後、そして百年後、私たちが今使っている新しい言葉のうち、どんな言葉が残っているのだろうか。できれば明るく機智にとんだ言葉が定番(これも流行語だが)になってほしいと思うのだが。

(金田一春彦「はやり言葉」による)

(注) センセーショナルな——人々の興味や関心を引きつけるような。
(問1) つつみなくとあるが、この言葉はどういう意味か。現代語で書かれた文章の中から、相当する箇所を十五字以内でそのまま抜き出して書け。

(問2) (2) ちようどとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。
ア カッコをつけて イ まねたがるのを
ウ 非難するのと エ 同じ口調だ

(問3) (3) また言葉がはやるには、それを使い出した人に大変な魅力がある、ということが不可欠な要因になる。とあるが、ここでいう「不可欠な要因」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。
ア 無理のない条件 イ 願ってもない条件
ウ さまたげになる条件 エ なくてはならない条件

(問4) (4) 一体どんな言葉が将来定着していくのか、の「か」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——をつけた「か」のうちから選べ。
ア 月日のたつのはなんと早いことか、とため息をついた。
イ 一緒にキャッチボールでもしようか、と友人に声をかけた。
ウ 日食はどうして起こるのか、と弟は不思議そうに空を仰いだ。
エ こんな晴れた日に雨など降るものか、と傘を持たずに外出した。

(問5) この文章で筆者が取り上げている「はやり言葉」の中で、

「矢つぎばや」は、物事を続けざまに素早く行う様子を表す言葉として使われている。矢つぎばやを用いて、十五字以上三十字以内で文を作れ。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

国語

解答

- ① (1) けいさい (2) せんりつ
(3) しずく (4) すると
(5) もさく
- ② (1) 改札 (2) 専門 (3) 額
(4) 祝 (5) 鉄棒
- ③ [問1] ア [問2] イ
[問3] ア [問4] ウ
[問5] エ
- ④ [問1] イ [問2] ウ
[問3] イ [問4] ア
[問5] 解答例：現代の遊びは、ルールがあつたり道具を使つたりする人工的で反自然の遊びが中心である。しかし、遊びは人間の心の中で人間と自然とを結びつけるものだと筆者が述べているように、現代文明が自然からますます遠ざかってしまわないようにするためには、自然の中で自由に遊ぶことが必要であると思う。自然と一体化するような遊びこそが本当に豊かな遊びなのだから、自分の生活の中にもそのような遊びを取り入れていきたい。(196字)
- ⑤ [問1] あたりをはばかりことなく
[問2] エ [問3] エ
[問4] ウ
[問5] 解答例：修学旅行の日程について生徒たちが先生に矢つぎばやに質問した。(30字)

解説

①〔漢字の読み〕

- (1)「掲」の訓読みは「かか(げる)。「載」の訓読みは「の(せる)。(2)音の高低とリズムとの組み合わせによって生まれる音の流れ。メロディー。(3)水などのたれて落ちるつぶ。(4)反対語は「鈍い」。(5)手がかりもないままに、いろいろと試みてみることを。

②〔漢字の書き取り〕

- (1)駅の入出口で駅員が乗車券を調べること。
(2)「専」の訓読みは「もっぱ(ら)」。 (3)音読

みは「ガク」。「金額」などの熟語がある。

(4)音読みは「シュク」「シュウ」。「祝日」「祝儀」などの熟語がある。(5)「鉄」を使った熟語には「鉄筋」「鋼鉄」などがある。

③〔小説の読解〕出典；大城貞俊「椎の川」。

《本文の概要》太一は、初めて辰兄イと二人きりで漁に出かけることになり、なぜか大人になったような気分になった。辰兄イが魚を捕るために海に潜ったあとで、水中メガネをかけて海の底をのぞいた太一は、その神秘的な海の魅力に不思議な感動を覚えた。同時に、この海の上を一人で泳ぐことが大人になることなのだという誘惑を覚えて、思い切って海へ飛び込んだ。

[問1] <心情の理解> 昼前になり、実際に漁へ出る直前にまた海を見に行つた太一の様子から考えてみよう。「太一は、心踊らせて家へ戻り、辰兄イに潮が引いたことを告げた」とある。潮が引くのを待っていたのだからイは誤り。ウの「不安」、エの「小道具の作り方を教えてもらった」という気持ちは、本文からは読み取れない。

[問2] <表現の理解> 潮の引き具合を確認しに行つた太一が、そのとき実際に見た情景である。アは「想像力豊かに思い浮かべながら」、ウは「時間の経過とともに」が不適切。また、珊瑚礁の色に着目した表現なので、エの「陰影に富んで」「大づかみに表現」も不適切。

[問3] <状況の把握> 次の場面で、太一に釣りを教える辰吉の、温かく励ますような態度から判断する。このときはまだ太一は釣りをしていないのでイの「釣りも未熟な」は誤り。手で押さえようとしているので、ウの「ただ目を丸くするばかり」、エの「戸惑う」も誤り。

[問4] <心情の理解> 「胸を張」るは、得意になった様子を見せることなので、イ・エは不適切。アの「辰吉より釣りの腕がまさると分かつて」ということは、本文には書かれていない。

[問5] <主題の把握> 漁に出るのを心待ちにし、魚を釣って胸を張る太一の様子や、一人で泳ごうと決心した心情を読み取る。アの「新しい漁法を発見」、イの「太一に厳しい試練を与えながら、遠くから見守っている」は、本文にない内容。太一は「漁師」ではないのでウは選べない。

④〔論説文の読解〕出典；岩田慶治「遠景の<遊び文化>」。

《本文の概要》狩猟採集民の生活は、予想に反して余裕があり、生きるための生活と遊びが一

体化している。産業社会においても、仕事と遊びの一致が求められている。また、遊びは人間の精神の深みにおいて人間と自然を結びつける。自然からますます遠ざかっていく現代文明においては、自然の中での自由な遊びが、自然を取り戻すための出発点となる。自然と一体化するような豊かな遊び、本当の遊び文化を回復したいものである。

〔問1〕<文脈の把握>筆者は、第二段の友人の話聞いてびっくりしたが、やはりその話のとおりなのだろうと考え直したのである。アのように「遊びながら暮らしている」わけではない。

「生きるために必要な物資を集めるには、日に二、三時間もあれば十分だ」とあるから、エはおかしい。また、この民族は「農耕以前」なので、ウの「農耕によって」は当てはまらない。

〔問2〕<文章内容の理解>直前の二文の内容から考える。理想的な生活(人生)とは、「仕事と遊びの一致」した生活である。どちらかに片寄っているイ・エは選べない。アは「子供の遊び」だけに限っている点が不適切。

〔問3〕<文章内容の理解>第六段の前半で述べられているように、政治・経済・文化という上層の交流が行われるよりも極めて古い時代に、遊びによる交流が既に行われていたのであるから、ア・エは誤り。遊びの調査によってわかるのは、遊びの交流によって共有されたものであるから、ウの「各文化の特質」は不適切。

〔問4〕<段落関係の把握>第五段では、遊びが民族の領域を超えて広がっていることを例を挙げて述べている。第六段では、それを受けて、遊びの交流によって何が共有されたのだろうかという新たな問題を提起している。

〔問5〕<作文>傍線部(4)の、我々は「自然の中における」「自由であることに由来する遊びを忘れてしまった」のではないかという内容をふまえたうえで、それが「現代文明」とどうかかわっているのかを考えてみよう。

5〔読解総合問題〕出典：金田一春彦「はやり言葉」。

<本文の概要>はやり言葉というのは、平安時代にはあったのではないだろうか。そして鎌倉時代の『平家物語』からは、言葉として新しい表現がどんどん生まれたと思われる。江戸時代に入ると、講釈師の語り、歌舞伎や浄瑠璃、サーカスの興業のような「からくり」など、庶民の娯楽から多くのはやり言葉が生まれた。大衆

にアピールするものから流行語が生まれるということは、今も昔も変わらない。現代ではマスコミの数が多く、新しい言葉が浮かんでは消え、消えては浮かぶ状態なので、将来どんな言葉が定着していくのか、想像もつかない。

〔問1〕<現代語訳>「つつみなく」は、形容詞「つつみなし」の連用形。遠慮がない、慎しみが無いという意味。直後の「いひたるは(言ったのは)」に着目して、現代語の部分と対応させてみよう。

〔問2〕<文の組み立て>「ちょうど」は副詞で、ここでは、あるものの性質や形などがほかのあるものととてもよく似ている様子であることを表している。直接続けてみて意味の通じるものを選ぶ。

〔問3〕<表現の理解>「不可欠」は、どうしてもなくてはならない、という意味。「要因」は、何かが起きる原因として考えられるものの中で主要なもののこと。ここでは「条件」と同じ意味で用いられている。

〔問4〕<品詞の意味>傍線部(4)の「か」は、終助詞で疑問の意味を表している。アは感動、イは勧誘、ウは疑問、エは反語の意味を表している。

〔問5〕<作文>問いの文中で示された「矢つぎばや」の意味を参考にすること。主語と述語の関係がはっきりした文を作るように心がけよう。